

不登校・ひきこもりの現状と課題

～切れ目のない支援を考える～

「教育と福祉の連携」について困難感や必要性を感じたことはありませんか？
このシンポジウムでは、教育分野と福祉分野から、
不登校やひきこもりの現状におけるニーズやウォンツについて情報を共有し、
切れ目のない支援の実現に向けて必要なことを意見交換し、課題を整理します。
興味関心がある方はご参加ください。

対談者

コーディネーター

一般社団法人hito.toco
代表理事 宮武 将大



不登校対策コーディネーター
藤澤 茜



香川県障害福祉課
副課長 水永 淳



香川県義務教育課
課長補佐 山内 秀則



香川県高校教育課
指導主事 井上 真弓



高松大学
発達科学部
教授
七條 正典

総合司会 香川県義務教育課 松下 誠治 香川県障害福祉課 大島 理子

日時 2月26日(日) 13:00~16:00

プログラム

場所 香川県庁東館2階 香川県庁ホール

12:30~13:00 受付
13:00~13:10 開会
13:10~14:00 基調講演
【一般社団法人hito.toco 宮武 将大】
14:00~14:10 -休憩-
14:10~15:40 パネルディスカッション
15:40~15:45 閉会

対象 教育・福祉に関わる方等

定員 100名程度

費用 参加費無料

申込 TEL又はFAX

参加申込書 香川県障害福祉課 精神保健・人材育成G(大島)宛

TEL087-832-3294 FAX 087-806-0240

所属

連絡先

(ふりがな)
氏名

〒
住所

共催

- 香川県教育委員会義務教育課生徒指導グループ TEL 087-832-3742
- 香川県健康福祉部障害福祉課 精神保健・人材育成グループ TEL 087-832-3294

教育と福祉の連携の可能性を探るシンポジウム

共催：香川県教育委員会義務教育課、香川県健康福祉部障害福祉課

「不登校・ひきこもりの現状と課題」

～切れ目のない支援を考える～

「不登校」とは、小、中、高等学校の児童生徒を対象とし、「何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しない、あるいはしたくともできない状況にあるため年間30日以上欠席した者のうち、病気や経済的な理由による者を除いたもの（文部科学省）」とされている。

一方、「ひきこもり」とは、「様々な要因を結果として社会的参加（就学、就労、家庭外での交流など）を回避し、原則的には6か月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態を指す現象概念（他者と交わらない形での外出をしてもよい）（厚生労働省）」とされている。

厳密には不登校の子どもの多くは毎日学校に行くことが難しい状態であるものの、ひきこもりのように外部との接触を絶ち、社会生活に支障が出るようなケースとは異なるため、基本的には、「不登校」と「ひきこもり」とは別の概念である。平成27年に実施された内閣府のひきこもり実態調査によれば、引きこもりになったきっかけは、「職場での挫折体験」や「就職活動の失敗」が合わせて35%、「病気」は14%、「不登校」は18%であり（複数回

答）、不登校からひきこもりへと移行するケースは1割強である。

しかし、ひきこもりが始まった年齢は、「14歳以下」（12.2%）と「15歳～19歳」（30.6%）を合わせると42.8%となり、4割強の者が10代のうちにひきこもり状態になっている。また、小・中学校の不登校児童生徒の半数以上（55%）が、90日以上長期欠席者で、現在、低年齢化も進んでいる。近年、完全に別物とは言い難い状況が生まれてきているのではないだろうか。

県内の状況はその傾向がより顕著で、県健康福祉部障害福祉課が平成30年度に県内の民生委員・児童委員に対するアンケートで調査した「ひきこもりに関する実態調査」によると、ひきこもりになったきっかけの20.8%が小・中・高等学校の時の不登校と回答している。また、文部科学省が実施した「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」によると、令和3年度の県内の不登校児童生徒の状況は、国公立小、中、高等学校において、年間30日以上欠席した不登校児童生徒数は1,866人（5年前から482人増）で、前年度より370人（24.7%）増加している。各校種別にみると、小学校では103人増加、中学校で225人増加、高等学

校で42人増加している。小・中学校は、そのうち57.8%が90日を超える長期欠席者である。特に、小学校低学年は5年前の3.6倍と急増しており、低年齢化が加速している。

不登校の男女比は小学校も中学校もほぼ半々で変わらないが、ひきこもりの男女比は7対3で男性の方が多くなることや、不登校が思春期特有の心理的な問題やいじめなどの人間関係、生活リズムの乱れなどが原因なのに対して、ひきこもりの多くは失業や病気などにより生活基盤を得られないことが原因であることなど、違いがあることを認めつつも、早い段階から社会とのつながりを絶つことなく、また、卒業による切れ目を作らない息の長い包括的な支援が求められているのではないだろうか。

そこで、上記のような問題意識のもと、要因は各々複合的で様々あるが、共通している非社会的な状況に着眼し、はじめの一歩として不登校の現状と課題、ひきこもりの現状と課題を突き合わせ、これまで別々に支援を行っていた教育分野と福祉分野が連携・協働し、切れ目のない包括的な支援の実現に向けてできることはないかを検討することが、本シンポジウムのねらいである。